

COLUMN

わたしの調査道具

やきもの研究者に伝わる木製の尺

やきものを専門とする私は、壺のサイズを測る機会が時折あります。そんな時に活用するのは、この木製の尺です。片面に高さを測る目盛、もう片面に径を測る目盛がついています。木製ですので、やきものの表面に触れてもカチンと音が立たず、安心です。時折「どこで売っているのか」と聞かれますが、市販品ではありません。先輩研究者が使っているのを見て、その形をメモし、木工製作をしている知人によってもらった特注品です。その先輩もまた、先輩の尺を写したそうです。まさにやきもの研究者に代々写し継がれる特別な調査道具といえます。

(文化財情報資料部・田代裕一郎)



シリーズ「無形の道具紹介します!」 第1弾 ～三種の神器 平台・箱馬・毛氈～

無形文化遺産部では、公演機会の少なくなった古典芸能等の記録撮影を行い、可能な範囲で公開を進めています。例えば邦楽の収録では、なるべく普段の舞台に近い環境で演奏してもらうため、無形文化遺産部のスタッフが平台^{はこうま}を箱馬^{はこうま}で支えて組み立て、上から毛氈^{もうせん}を掛けて整えて「山台^{やまだい}」を設えます〔上図〕。平台・箱馬・毛氈は、無形文化遺産部の実演記録にとって欠かせない道具、言わば「三種の神器」なのです。

(無形文化遺産部・前原恵美)

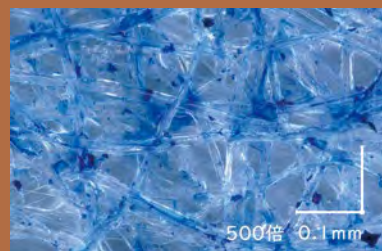
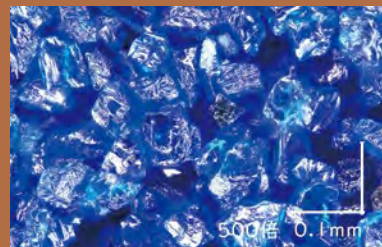


令和6(2024)年度実演記録「宮園節」
第9回の様子

顕微鏡で覗くミクロの世界 —文化財の彩色の秘密—

顕微鏡を覗くと、普段見えないミクロの世界が広がり、文化財の色を調べる手がかりになります。たとえば、絵画と浮世絵の青を顕微鏡で見ると、絵画の青はゴロゴロした粒子〔上図〕で、浮世絵の青は紙の繊維を染め付ける力のある非常に細かい粒子〔下図〕でできています。絵画の青は藍銅鉱という鉱物を砕いて作られた古い顔料で、浮世絵の青は18世紀以降に開発された鮮やかな人工合成顔料です。これが北斎や広重の作品でよく使われました。こうした違いを見つけることで、色彩が持つ深い意味と歴史が見えてきます。ぜひ顕微鏡でミクロの世界を体験してみてください!

(保存科学センター・紀芝蓮)



市販画材の群青(上図)とブルシャンプルー(下図)を使って塗布した見本の顕微鏡写真です。

映画のなかのアジアの街・建築 第2回 消えゆく街のいとなみ —「長江哀歌」^{エレジー}

街の家々が解体され、馴染みある風景が失われていくとき、私たちは何を選択し、どのように振る舞うのだろうか。

「長江哀歌」は、大河・長江の中流に建設された三峡ダムに沈みゆく奉節の街を舞台としています。撮影時の2005年は、ダムや巨大な橋、移転先の真新しい都市が急ピッチで建ち上がっていきな、劇中の台詞にもあるように「2千年の街が2年で消える」時期。水没する家々の解体作業が進められていました。

人力で破砕されるコンクリブロック壁とハンマーの音、解体決定の「拆」印が押された家、水没前最後の発掘作業——。人々の実生活が映し出される傍で、消えゆく街のなかで、登場人物たちの物語が展開していきます。

時に、UFOが出てきたり、記念碑的建物がロケットのように飛び立ったりと、少し不可解で幻想的な“映画の”シーンも現れますが、それらすべてをくろめて、変貌する街での本当の出来事のように感じられます。

[作品情報]

題名|長江哀歌

監督|ジャ・ジャンクー

出演|チャオ・タオ、ハン・サンミン、他

公開|2006年

(文化遺産国際協力センター・黒岩千尋)